当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷筍集

三月号　2025

ため息の一つまじりし夜露かな　福　のり子

窓開けて台北の冬匂ひ立つ　小嶌　和

まつすぐに墨を吹き上げ寒の烏賊　大石　高典

菰巻くや幹をひと撫でする庭師　中島　冬子

十秒の不在か在かかいつぶり　齋藤　亜矢

枯蔓の取り払はれて売家札　朝田　玲子

接待の飴玉まろし冬麗ら　田中　白秋

オリオンの夜を煌々と医療の灯　福江ちえり

病棟はゆふやみのいろ冬木立　牧田満知子

柿の実の消えたり熊の爪の跡　森川惠美子

猫の影が障子を来るよ冬うらら　荒木　昭代

雪積り富士は正しく富士となり　伊東　弥生

園児らの秋蚕の繭の十個ほど　立石　律子

冬めくや生きもののごと竹を編む　谷口　文子

初めてのボーナスに買ふ背広かな　福地　義雄

ストーブの薪運び込む日課増え　藤本　隆子

三方五湖の辺や姑の凝鮒　前田　鈴子

選ばれし冬至南瓜ぞ納屋の隅　森　幸子

低吟の路地を過ぎゆく寒夜かな　加藤　広文

火の番の声一寸のずれもなく　加藤　剛

地のこゑの鎮もる銀杏落葉かな　鈴木　大輔

年の瀬や母のつまづく車止　有岡　萃生

長男は餅のあふるる雑煮椀　國兼　弓華

千両の赤い実なれど仏花とす　原　順子

暮れ満つる窓の外なほ寒茜　寺川　貴也

空近き山の出湯は雪催　石上　敦子

溶岩の中よりひびく虫の声　西澤　勝

江戸つ子に合せし味の煮大根　柳堀　悦子

いふなれば日陰の似合ふ実千両　城戸崎雅崇

スーツケース我先に往く年の暮　木村　英昭

忘年会時間厳守に一丁締　入江　祐子

畑に出てふたりが対の冬帽子　小堀　恭子

数へ日といふ一日の始まりぬ　中村　淳子

小白鳥の旅の途次なり群大き　山口　容子

夜も力抜かぬ風あり冬銀河　片岡　和子

ふるさとへさそふ訛や年の暮　小川　妙子

誰もたれも着ぶくれてゐる影黒し　大村　誠

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷筍集

二月号　2025

小灯に残る一章残る虫　朝田　玲子

窓際の瓶に日射しの秋の色　齋藤　亜矢

おはなしに声色遣ふ寒夜かな　有岡　萃生

小石にも地球の歴史冬日向　鈴木　大輔

落葉踏む地球の向かう落葉踏む　河村　純子

神社みな海へ向く町乾風吹く　片岡　和子

かまど猫いつも主を見張りをる　中井　昭雄

雪ばんば伏し目の吾について来し　伊東　弥生

秋灯し母の教へは今も尚　植田　清子

枝先のかすかに震へ鵙の贄　大野千鶴子

小春日や鱒は釣られてすぐ焼かれ　立石　律子

白足袋の家族分あり古簞笥　森　幸子

花野より呼ぶ声のあり誰も居ず　加藤　広文

木犀や犀星歩きたる田端　宮坂　美緒

カフェラテの泡の消えゆく初時雨　田中　白秋

車座は男子学生芋煮鍋　大石　高典

えんとつがなくともサンタクロースの来　山本　京子

襖替へ轅合はせし御所車　小堀　恭子

山形の盆地や冬の靄に浮く　田中　勝

俊太郎サインの絵本冬茜　佐藤　慎一

体操は日課となりて冬の朝　加藤　節江

静けさの沁みゐるを聴く小夜時雨　原　順子

ほろ酔ひや部下を励ます冬銀河　石田　信之

一乗谷を木枯の駆け走りたる　井本　陽子

木枯びゆうびゆう涙目に目薬　入江　祐子

こんな仔と暮したき夜の初時雨　住田　祥子

ストーブに煮物まかせて読書かな　大畑　照子

炉開を祝ふ松風ありにけり　相原　弘子

同じ色二つとはなき柿落葉　小川　豊子

三井寺の鐘澄む日なり響くなり　國兼　弓華

醍醐寺や銀杏色づく空となり　幡山　杏

虫の音や汝の待つ家の窓明り　林　剛

木枯しの夜半とて酒の燗をつけ　矢野　裕俊

秋空へ波打ち響くつづみ岩　大村　誠

殉教の原の城跡石蕗の花　杉本　伸一

渡り鳥われはこの地に生きてをり　田崎セイ子

霜月や解し乾かし鉢の土　玉元　庄弘

当月の氷壺集・氷室集より尾池葉子抄出

氷筍集

一月号　2025

秋草に分け入る馬の背の揺るる　齋藤　亜矢

ふるふると萩の実の揺れ嘴の揺れ　朝田　玲子

閉店の奥にひとつの灯の夜長　有岡　萃生

札所までつれなき雨や曼珠沙華　田中　白秋

海峡の嗚咽めくなり雁渡し　片岡　和子

影踏みに大人が興じ後の月　福江ちえり

十月の十月桜会ひ得たり　城戸崎雅崇

秋の蚊に献血と洒落見てゐるも　友永基美子

秋深し昔登りし木を撫でて　福地　義雄

弱法師杖の先なる虫の闇　河村　純子

友の子を背負ふぬくもり秋高し　宮坂　美緒

剪られたる木口明るき秋日和　鈴木　大輔

灯を消して明日は離郷の虫の闇　加藤　広文

色変へぬ松や鉄路の延びてをり　加藤　剛

傷つきし林檎やタルトタタン焼く　宮坂　千種

大潮の波のたゆらに秋の風　幸城　麗子

新発意も作務衣着せられ木の葉掃く　土居　郁雄

渡り鳥振り返ることなかりけり　古閑　裕海

霧去るを待つてゐる間の足湯かな　西澤　勝

禅寺へ道ふり分けて草紅葉　髙橋　房子

素数発見四千万桁星月夜　木村　英昭

羅の尼僧ふはりと茶を運ぶ　世古　一穂

横浜港異国の香る秋の風　野村　幸江

障子貼る今日より新たなる日和　森　裕子

天翔る竜の如きや秋の雲　小長井　敬

石垣の崩れに滲む秋の雨　坂　利美

虫時雨外灯あはき勝手口　大畑　照子

天空に山を浮かせて朝の霧　小西　恭子

指先に渋光らせて柿を剝く　小西　尚美

風来れば風と遊ぶよねこじやらし　中村　淳子

久し振りに浸かる湯船や蚊の名残　齋藤　耐

昼寝しばし里に居たれば永遠のごと　林　剛

秋澄むや聞香の墨する音も　藤木千惠美

米櫃へ音のよろしき今年米　山本　京子

天高し頂はなほ天高し　寺川　貴也

海べりと山路を行き来厄落し　杜　博之

街路灯かすむあたりや虫の声　大村　誠